

特別支援学校の図画工作科における 主体的・対話的で深い学びの促進

～知的障害のある児童の「対話的な学び」に着目して～

Keyword：主体的・対話的で深い学び、知的障害、ABC分析

研究の背景

新学習指導要領：
「主体的・対話的で深い
学び」の実現に向けた
授業改善の推進

先行研究上の各校園の取り組み
(菊池, 2020; 水森, 2019)：
言語を用いた活動や学習が
取り扱われる傾向

本校教員対象アンケート結果
(渡部ら, 2016)：
「意見を出そうとするとなかなか出ない」
「全員ができるわけではない」等



目的

本研究では、発語の見られない児童も対象とした授業実践を行う上で、対話的な学びを「教室空間におけるものやひととの相互作用」と定義した。その上で事前観察時の対話エピソード記録に基づいて、児童が「働きかけ」をしやすいのはどのような環境かに関する仮説を立てた。この仮説に基づいて授業実践し、児童の学びを促進する環境設定を明らかにすることを目的とした。

研究方法

①7月と9～12月の授業で児童の対話行動を引き出す工夫として「児童にわかりやすい言葉を用い見本・評価基準を提示する」、「教員が共感的に反応する」を実践した。授業担当者4名で児童の対話をABC分析記録用紙(図1)を用いて記録し、児童の対話行動(B)の直前の出来事(A)と直後の出来事(C)に着目した。対話対象(もの：教材、ひと：教員・友だち・その他)、対話内容(反応した、働きかけた)の分類も行った。
②7月と9～12月の授業から、1時間ずつ抽出し、授業時間40分を1分間隔で区切り、そのインターバルが終わる瞬間の児童の参加行動の有無を記録し、参加率を求めた。参加率＝(授業参加行動が見られたインターバル数)／(全インターバル)×100で算出した。

A (直前の 出来事)	B (児童の 行動)	C (直後の 出来事)

図1 対話エピソード記録用紙

結果

①児童の対話対象・内容の変化

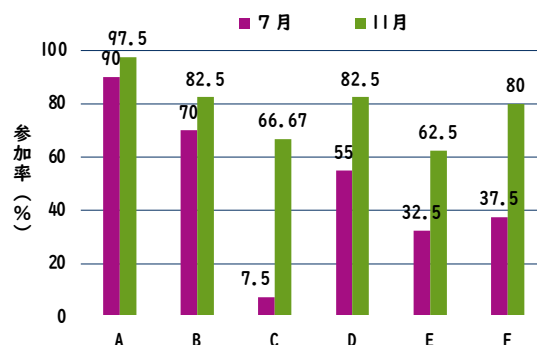
事前観察時は「教員」「教材」との対話の割合が高かった。対話行動を引き出す工夫を実践した7月、9～12月ともに、全体に占める「教員」に「働きかけた」割合が上昇した。また「教材」との相互作用の際の教員支援有の割合が減少した。

		もの		ひと				計 (%)
		教材	教員	友だち		その他		
				反応した	働きかけた		反応した	
事前 観察時	6名 56件	39 (22)	43	6	1	5	6	100
7月	6名 23件	56 (27)	28	14	1	0	1	100
9～12月	6名 33件	47 (20)	38	13	2	0	0	100

なお、()内は教員支援有の割合を示す

②授業参加率の変化

7月の参加率は7.5～90パーセント(平均48.7パーセント)であったが、11月は67～97パーセント(平均78.6パーセント)になり、児童間の差が減少した。



考察

発声や発語が見られにくく非言語的な表現が主な児童の対話対象・内容は、「教員に対する反応」と「教材」が多くを占めることが数値上でも明らかとなった。児童が「働きかけ」やすい状況をつくり、実際に働きかける割合が上昇したことから、児童にわかりやすい擬態語・擬音語を取り入れた指示、課題分析により細分化した活動の課題提示、行動に対する共感的な反応を行うことで、児童の課題理解・遂行がすすみ、対話行動も継続し、学びが深まることが示唆された。また対話的な学びの視点で環境改善を継続することで、授業参加率も上昇し主体的な学びが促進することも明らかとなった。

参考文献

- 原田新・枝廣和憲(2017)：大学のアクティブラーニング型授業に対応したユニバーサルデザイン環境に関する一考察。岡山大学教師教育開発センター紀要。第7号別冊，137-146。
 菊池一文(2020)：主体的・対話的で深い学びとキャリア発達支援。特別支援教育研究。2020年3月号，2-7。
 水森ゆりか(2019)：アクティブ・ラーニングの課題—多様な学び方という観点から。四天王寺大学紀要。第68号，333-342。
 渡部敬真・日裏香織・寺谷要(2016)：知的障害特別支援学校におけるアクティブラーニングの視点に基づいた教科学習の検証。大阪教育大学附属特別支援学校平成28年度年報，29-34。大阪教育大学附属特別支援学校。